



〔エッセイ〕 シャリテ大学医学部病院連合ベルリン

高野 光 司

「シャリテ医科大学-ベルリン」というような記述を見て、ベルリンには医学の単科大学はない筈だが、と思い「ヤファー」で調べようとして日本語で検索してみると「シャリテ医科大学ベルリンと千葉大学との提携」などとあってこの記述が正しいとしか思えないくらいに書いてある。同じヤファーだがドイツ語で調べてみるとずいぶん詳しく参考になることも多かった。

(ところでヤファーの語源をご存知か。ガリヴァーの旅行記の最後の章、馬の国に住むのがヤファーである。かつて解剖学を教えておられた故大谷克己名誉教授は、その前の章に出てくる空の浮島を持ち住んでおられたらしい。この記述がわからなかったらスウィフトの原文か訳文を一読されるとよい。)

ドイツ語では、大学レベルの教育施設をHochschuleという。しかし英語に直訳するとhochはhigh, Schuleはschoolなので、Technische Hochschuleを工業高等学校と誤訳した超有名大学の学長もいたので、くどいがお断りしておく。最初に述べた定義、大学レベルにしたがって、教授資格試験Habilitationに合格した大学教師をHochschullehrerと言い、大学法をHochschulgesetzという。しかし総合大学と単科大学を区別している場合に総合大学をUniversitaet, 単科大学をHochschuleと厳格に分けて使う。

筆者の理解するところでは大学Universitaetとは「学問すべて」をやる場所である。かつて工学は、学問と認められていなかったので工学部は存在しなかった。19世紀後半になって、ドイツでは10程の工業(科)大学Technische Hochschuleが作られた。

一般的にドイツでは大部分の大学は国立(正し

くは州立)であり、授業料は徴収しないようだ。ドイツ全体の大学法Hochschulrahmengesetz des Bundesがあり、それに従って各州には州独自の大学法Landeshochschulgesetzがある。一般的に公立の教育そのものは、ほとんど無償だが、大学生にはいろいろ恩典があり(少額の健康保険, 安価だが栄養たっぷりの学生食堂の利用など)失業しているよりずっと暮らしやすいので在学を続ける者もいる。一般にドイツの諸試験は、例えば医師国家試験などは3回まで受験が可能だが、それ以降は一生受験できない。しかし大学には在学期間の制限はなかった。各種国家試験に合格したり、論文を書いて博士号を得たりして大学卒業とする。

すでに述べたように(るのはな同窓会報, 172号), 第二次世界大戦前にできた大学は、一般に一都市一大学であるので、正式の名前を言わず、ゲッティンゲン大学とかフランクフルト大学という。この言い方は、「ほとんど正式」であるといえる。だから論文の所属名も誰もが大学の「(儀式的)正式名」は書かないで都市名を使っている。私自身も一度国際会議に出席した時、大学事務長からのお達しに従ったところ、南米の同僚から「ゲオルグ・オーガスト大学とはゲッティンゲンに新しくできた二つ目の大学か」と聞かれてから、いっさい使わないことにした。

ドイツには中世以降形式的には皇帝がいたが実際には、多いときには300ほどの王侯貴族の国に分かれていたこともある。ゲーテが宰相であったワイマールの人口は高々1万ほどであった。マールブルクやチュービンゲンのような今日でも人口10万にも満たない小さな都市でも大学があること

もあった。

いずれにせよ、一つの都市には一つの大学しかなかったのが、大学は所在地の都市名で呼ばれたのである。

さて宗教改革、啓蒙主義の勃興により多くの大学ができたとは言うものの、いずれも小規模のものであった。ドイツ語圏でも1750年頃には40ほどの大学があったが学生総数はドイツ語圏合計6-7千で教授数もウィーン大学ですら37人であった。40人を超すものはゲッティンゲン大学とライプツィヒ大学に過ぎなかった。

プロイセン（プロシア）は当時のドイツで最も勢力のあった国の一つであるが、カントのいたケーニヒスベルクにある大学（教授数33人）、フンボルト兄弟が最初に学んだフランクフルト・アン・デア・オーダーの大学（20人）、当時、時代の最先端を行く1694年設立のハレ大学（37人）があったが首都ベルリンには大学がなかった。

1737年ゲッティンゲン大学グレートブリテンとロー・サクソニーの宰相ミュンクハウゼン（ほら男爵、少年文学の走りとして有名なミュンクハウゼンの一族）が大学の法学の研究は王の影響の及ばない国の南端のゲッティンゲンに、時代の先端をいくハレ大学を模範として学問の独立を標榜する大学をつくった。ゲッティンゲンはハンザ同盟の小都市で（詩人ハインリッヒ・ハイネは大学ができてから80年も経っているのに「ハルツ紀行」の第1ページにゲッティンゲンの竈の数は999と書いている。）ミュンクハウゼンは、みずからゲッティンゲン大学の初代事務総長（クラトア）となり創設時にライプツィヒと並ぶドイツ語圏最大ともいえる大学を創立した。（1749年生まれのゲーテは、ゲッティンゲン大学に学ぶことを強く望んだが、父親はそれを許さず、自らが学んだライプツィヒに学ばせた。ちなみにファウストの舞台、たとえば「アウエルバッハのケラー」はライプツィヒに始まる）。

1804年に皇帝になったナポレオンはヨーロッパを席卷し、ドイツの大学をつぶしにかかった。例えば数学者ガウスがゲッティンゲンで学んだ後に就職していたヘルムステットの大学もつぶされた。ゲッティンゲン大学はドイツの大学というより「ヨーロッパの大学」であるということで存続

を許された。ちなみに当時ゲッティンゲンのあたりのグバニエール *gouverneur* は物理学者マクス・プランクの祖父（ゴットリープ・ヤーコップ・プランク）であった。

1807年には名門ハレ大学も閉鎖を余儀なくされた。ドイツ語圏内で最も勢力があった国のひとつプロイセン（プロシア）には、首都ベルリンに1700年にできた科学アカデミー、1770年の鉱山大学、そして、1710年に迫りくる伝染病に備えた（当時は市外にあった）伝染病棟シャリテーがあったが大学は無かった。文科国家の首都として、そして失われたハレの大学の代償として大学が切望された。ベルリンの政治家連は当時最も進んだ大学としてゲッティンゲン大学を模範とした。折しもゲッティンゲンで学び、大学では研究、学問の自由、そしてまた研究するもののみが教えるべきと考えるウィルヘルム・フンボルトが文部大臣になり、ゲッティンゲン大学を模範として大学を創設した。（現在、大学正門の両側に、ウィルヘルムとアレキサンダーのフンボルト兄弟の大きな座像がデンと構えている。）

一方、前述のごとく大学設立のほぼ百年前の1710年に慈善（シャリテー）避病院が開設された。19世紀以前には、入院するのは身寄りのない（貧乏な）人々を主とした。ベルリン市の拡張によりシャリテーも市内に入り、皇帝の費用や市民の寄付により経営された。

大学開設の15年前には軍医養成の施設が作られた。この施設から後に病理学者ウィルヒョウや生理学のヘルムホルツが育った。1810年大学創設の際、医学部長には1801年以来シャリテーの病院長であり、かつ皇帝の侍医であったフーフランドが就任した。しかしプラクシスを目的とするシャリテーは、建学の功労者フンボルトの大学理念、「研究と教育」に反し、大学に一体化できなかった。しかし長い時間を経て、次第に大学医学部と一体化の道を歩んだ。1856年にはウィルヒョウが医学部病理研究所長となり、1876年に、大学衛生研究所が設立、1880年にはコッホが所長に就任した。1929年には外科を最後にシャリテーは大学医学部に合体した。

1810年以来のベルリン市にある大学は設立当時の皇帝の名をとってフリードリッヒ・ウィルヘル

ム大学を名乗っていた。時にカイザーウィルヘルム大学と呼ばれるほうが多かったかもしれない。それよりもドイツの大学は一都市一大学なので都市の名を大学の呼び名としていたので、本大学もベルリン大学で通っていた。日本の明治政府もそのように使っていたようだ。

第二次世界大戦により東西に分割され、ベルリンは大部分が東地区に入る。大学名も皇帝の名では共産主義にふさわしくないで、設立にあるいは功績のあったウィルヘルム・フンボルトの名をとりフンボルト大学と称した。シャリテの名で親しまれていた大学医学部も東地区にあったので相変わらずシャリテの名で呼ばれていたが大学病院になった。さて西地区には大学はなくなってしまったので新しく自由大学を新設した。そして西側にあった市立病院と大学付属のベンジャミン・フランクリン病院を自由大学医学部附属病院とした。1977-82年には22階の病棟が完成した。ウィルヒョウ・クリニックがフンボルト大学に移管するなどの変遷を経て、シャリテ及び自由大学に属するすべての大学病院が一つになり、二つの大学医学部の各附属病院も合併して

Charité-Universitätsmedizin Berlin

となった。

これを何と訳したらよいのか。最初に述べたごとく、Hochschuleは、この場合単科大学と理解すべきであるが、ベルリンには医科の単科大学、日本語の“医科大学”はない。いずれにせよベルリンの大学病院は世界的に見ても特殊な二つの大学医学部が一つの病院群を持つというものである。

私の提案: シャリテ大学医学部病院連合ベルリンあるいは、シャリテ大学病院連合ベルリン。もっと良い案もあろう。

【追記】

本文は「あのはな同窓会報第176号」において杉田克生教授の司会による対談で森教授から「(大学の和訳は) 先生がきめよ」との言われたことに対し、正式に応えたものである。ベルリンの大学の開学は1810年である。お詫びして訂正する。

千葉医学93巻に掲載のエッセイ「博士論文審査の主査について」は関係諸先生の真剣な討論を願ってやまない。